

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年 6月10日現在

機関番号：42608
 研究種目：挑戦的萌芽研究
 研究期間：2011年度～2012年度
 課題番号：23652079
 研究課題名（和文） 近代日本文学の「優生思想」問題に関する表象分析・比較思想史的研究
 研究課題名（英文） An Analysis of Representations of “Eugenic Ideology” in Modern Japanese Literature and Research in Comparative Intellectual History
 研究代表者
 辻 吉祥 (TSUJI YOSHIHIRO)
 青山学院女子短期大学・現代教養学科・准教授
 研究者番号：50409588

研究成果の概要（和文）：

本研究は、〈近代〉日本における最も包括的なイデオロギーである「社会進化論」「優生思想」と、その文学に与えた影響、相互浸透関係を明るみに出すことを眼目とする。国際的視野でその実証資料を収集する一方、明治・大正期の解放思想・文学が、今日の発想からは死角となる形で自然史的思考の侵蝕を受けており、文学的〈近代〉における「社会」性が今日からする定義とは異なること、その経緯の重要な諸点を明確にすることができた。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research is to clarify the most comprehensive ideology of “modern” Japan, “Social Darwinism” or also known as “Eugenic Ideology,” and its influence on and mutual interrelationship with literature. Based on the collection of substantive materials from international perspectives, it is clear that the liberation ideology and literature of the Meiji and Taisho periods were eroded by ideas of natural history in ways we have failed to recognize, and the nature of “the social” in the literary modern was different from how we define it today. This research clarified important points in that process.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,000,000	300,000	1,300,000

研究分野：人文学

 科研費の分科・細目：文学
 各国文学・文学論

 キーワード：優生学
 国文学
 外国文学
 比較文学
 思想史
 木下尚江

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

1. 研究開始当初の背景

Eugenics Industry とよばれた、80年代から90年代にかけての膨大な優生学関連文献の登場は、われわれの〈近代〉の質を、あらたな視点で見つめ直す必然性と必要性を確実に迫るものであった。また同時にそれは、何らかの大きな物語、ないし一部のイデオロギーの錯誤に帰して、問題を合理的に理解、認容できるレベルに分類、処理をするというような通有の対処を拒んでおり、提起された問題の容易ならぬ大きさを指し示しつつ、問題の処理方法自体にもまったく新たな様式を要請するものであった。

一般の認識に照らしてこれを言い換えれば、ナチズムのユダヤ教徒、障害者断滅政策にまでつながったその問題は、じっさい、ナチズムを断罪した諸国家が、すでにみずから犯していた罪でもあったのであり、広く社会主義圏、資本主義圏のイデオロギー上の区別を問わないものであった。のみならず、今日の北欧福祉国家の成立基盤にも関与していることが明らかとなっており、既存のいかなるイデオロギーを機軸とした問題処理の枠組みからも解消できない、特定の立場をとれば、そこから批評可能であるというような外部を用意しない問題構制であることが明瞭であった。

そのなかには当然、明治維新以降、西洋追従を旨としてきた帝国日本のあり方が含まれているのであり、そうした〈近代〉化とその価値観を歴史的に形造る過程に随伴してきた文学や、あるいはそれと対立軸をつくり、一見拮抗するかのように見えていた解放をめざす諸思想・文学も、むろん無傷ではなく、再検証の対象として、十分に値すると見なさなければならなくなったのである。

ここにたとえば近代的自我の発達ないし展開の視座からのみ文学のあり方を評定するような旧来の文学史観は、容易に、廃棄せざるを得ないものとして認識される。

以上の問題意識から見返せば、近代日本文学にその端緒から登場する、〈弱者〉の問題、〈貧困〉の問題、〈ジェンダー〉の問題、思想上はすでにたびたび指摘されてきた「社会進化論」の影響の問題などが、トータルにひとつながりの問題圏のなかで見直されるべきことが、課題として浮上してくるのである。

むろんこれらすべての問題に一挙に解答をあたえることはできないが、まずはそうした問題意識から見える、基点となる諸問題点

を切り出していくことに、研究の始点を据えることになったのである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以上のような既存の文学研究とは距離のあるところで生じていた学術的インパクトと、そこに引き出された問題意識から、〈近代〉の日本における、最も包括的かつ根底的なイデオロギーと見なされる「社会進化論」、すなわち「優生思想」とその文学に与えた影響、相互浸透関係を明らかに出す研究において、いくつかの重要な筋道をつけようとするものである。いわゆる「右肩上がり」の思想をその根本に据えてきたわれわれの〈近代〉性は、その達成の諸過程で同時に、さまざまな切り捨てを行ってきた。あるいはむしろ、それを条件とさえしてきた、といってもよい。このことは、19世紀半ば以降に顕著となった「進化論」を、そのベースに据えていることを端的に意味すると同時に、切り捨てられる「劣敗」を断滅する思想、「優生学」に、その達成の真の基礎を置いていることをも示唆している。進化論とは、単に時代を導き、規定した代表的思想ということに収まるものではなく、つねにその背後で必要とされた膨大な「劣敗」を死角とし、無感覚化する壮大な物語装置であった、と見なすこともできるのである。では、ここに對置ないし對抗されていてよいはずの「文学」は、二葉亭四迷『浮雲』とともに出発した「敗残」の近代文学は、いかなる相貌を見せることになるのか、その軌跡の検分が試みられることになるのである。

3. 研究の方法

先の課題を満たすために、その実証に必要とされる諸資料を、当初の計画通り、早稲田大学をはじめとした国内外諸機関にて、研究支援業務協力者の助力を得ながら収集し、問題別の系統化を施したうえで整理を行なった。

当初より研究の特色として考えられた資料収集上の留意点は、大きくは以下の通りである。

・ 諸外国語文献にあたり、西洋文学・思想の影響色濃い日本〈近代〉文学の原典をきちんと踏まえた論及が行なえるものにする。

・「進化論」を軸とする科学史、生物学史、遺伝学、また人種差別、貧民問題、犯罪人類学、精神医学、結婚論（性道德）等の諸問題文献について、「優生思想」の影響力を十全に踏まえるため、文理系、領域の差異を問わず収集し、解説すること。

それらは、まず一年目に学会発表を行なった木下尚江についての調査を一具体例にとるならば、

- (1) 同時代の自然主義文学者との関わり、相互の対比を明らかにする資料
- (2) 木下尚江の思想の国際的基盤を明らかにするために、とくに米国のヘンリー・ジョージについての、直接の資料、研究文献をはじめとした間接的な資料
- (3) 平民社に集った同人をはじめとする他の同時代社会主義者の資料
- (4) (3)の同人たちが読み、原典としていた各国社会主義の資料
- (5) 木下の同時代キリスト教関係の資料
- (6) 同時代のキリスト教と進化論の関係もしくは相克についての資料（英語圏と日本）
- (7) キリスト教（とくに禁酒運動、娼婦運動）と社会主義の関連ないし相克をめぐる資料（英語圏と日本）

といった資料群の各項目が、収集の基軸として設定され、領域横断性、国際的視野および文献からの考察といった研究課題の要目を満たす仕方で、問題の考究が行なわれている。

さらにこれら各論は、独立した論でありつつ、当初計画された研究の全体プラン——a. 「遺伝学」「進化論」文献の原典にさかのぼった検証 b. 貧困とその自然史的把握がもたらす問題点の考察 c. 理念的には異質なはずの社会主義と優生学の結合の問題の解明——を支える重要な諸要素としての位置づけが行なわれた。

記載上前後したが、課題にふさわしい対象として木下尚江が選ばれている事由も、研究課題追究の新基軸＝上記資料収集の各方針に、その可能性が重なるがゆえである。第一に、思想家（キリスト者・社会主義者）にして文学者であること、キリスト教と社会主義と進化論の交差点に成立している禁酒運動や娼婦運動（貧困・ジェンダー問題）に時代を代表する形で関わっていること、進化論の影響色濃いヘンリー・ジョージに多く影響を受けていること、よって国際的な資料調査が当然の前提となること、などである。

そしてそれらが、既存の研究史上も新しい意義が認められると同時に、本課題の総合的なテーマにも寄与できるものでなければならない。

その他のテーマも同様に課題を満たすに重要な各論として、領域横断的でかつ日本語にとどまらない文献の調査が、費用の許す範囲で可能な限り試みられ、収集、系統別の整理および実証的・基礎的な考察が施された。

4. 研究成果

現時点での本研究における成果は、端緒的かつ代表一人による実証作業を伴うものでもあり、けっして多いものではないが、大きく分けて以下の三点に整理することができる。

一つ目は、日本最初の社会主義者のひとりである木下尚江について調査研究にはいることができたため、進化論、当時の遺伝についての見解の水準を個々の文献に即して見定めることができた。そこから、文学テキストにおける表象の分析も同一の作家の思想のあらわれとして、比較対照する論及を、課題に適した新基軸によって行なうことができた。

二つ目は、明治期の森鷗外から芥川龍之介にいたる文学史の流れの中で、とくに戦争を主題に、心身の優劣の序列化の問題と交錯させながら、文学テキストの分析を行なうことができたことである。ここには精神医学の問題も含め、広くは課題のテーマ、狭くは細かな表象の分析を含み、これまでにない仕方で問題を位置づけることができたと考える。

三つ目は、1人の努力に限られた範囲内で限界があったが、今後のさらなる実証研究のための各国資料が収集、系統化できたことである。このことは、この課題の研究者個人にとどまらない意味を公的に明らかにし（後掲公開講座）、広く今後の各論的ないし総合的な論の展開が促されてゆくために、重要な基盤整備ができたことになる。

多分野の各国文献を一つ一つ読解しながらの作業は、急ぐことのできない歩みながら、確実に新領域の意義を確認させるものであり、是非とも今後のさらなる研究に繋げてゆかねばならない。

またもとより、研究成果には費用対効果的な記述を超える内容が含まれていなければならず、研究過程での未知数の発見の有無が、本質的になにより重要であるともいえる。この度の二年間で確かに得られたそれら「萌芽」は、引き続き行なわれる研究の中で、学術的かつ公共的な意義が獲得できるよう育ててゆくことになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

学会依頼発表

- ① 辻吉祥 (単独)、「禁酒から『ミルクと蜜の大地』へ——木下尚江の社会主義小説再考」、早稲田大学国文学会秋季大会、2011年12月3日、於：早稲田大学

[図書] (計 3 件)

- ① 辻吉祥、吉川弘文館、<事典項目>「広津柳浪」『明治時代史大辞典 第3巻 (に～わ)』、2013、917、13p (pp. 263-264)
- ② 辻吉祥、翰林書房、「戦争のあたらしい知覚——森鷗外『鼠坂』から芥川龍之介『奇怪な再会』へ」『生誕 120 年 芥川龍之介』、2012、319p (pp. 61-69)
- ③ 辻吉祥、吉川弘文館、<事典項目>「戦争文学」『明治時代史大辞典 第2巻 (さ～な)』、2012、997、11p (p. 454)

[その他]

ホームページ等

なお、成果広報の一環として、研究内容を生かした、二回の講演を以下の題目・日時・場所にて行なった。

- ① 辻吉祥
「大杉栄 自由恋愛Ⅱ」
青山学院校友会 女子短期大学同窓会
国文学科会 文学講座
2012年5月12日
於：青山学院女子短期大学
- ② 辻吉祥
「平塚らいてう 自由恋愛Ⅰ」
青山学院校友会 女子短期大学同窓会
国文学科会 文学講座
2012年4月14日
於：青山学院女子短期大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

辻 吉祥 (TSUJI YOSHIHIRO)

青山学院女子短期大学・
現代教養学科・
准教授

研究者番号：50409588

(2) 研究分担者 (なし)

研究者番号：

(3) 連携研究者 (なし)

研究者番号：